

●講演会  
イ・グワンス

## 李光洙と明治学院

波田野節子

天沢退二郎 研究所の所長をしております天沢です。去年から始まりました、「明治学院ゆかりの文学者たち」という連続講演会の第二回目といたしまして、韓国近代小説の父と言われる李光洙という作家が白金の明治学院で過ごした少年時代を中心に、波田野さんに講演していただきます。

明治学院ゆかりの文学者というと、鳥崎藤村という名前がすぐに思い浮かびますが、明治から大正、昭和にかけてさまざまな詩人や作家が明治学院に学び、あるいは教え、あるいはさまざまななかかわりをもっております。その人たちの名前を挙げていくと何かある筋が浮かんでまいりますが、それは決してばらばらに、こういう人もいた、こういう人もいた、というのではないような何かがあると感じられ、これをなんとか明らかにし

ようと思っております。この連続講演会の第一回は岩野泡鳴を扱いましたが、岩野泡鳴は非常に重要な作家ですが、また十分に評価されたとは言えない作家です。一方、今回取り上げる李光洙は韓国からの留学生でしたが、このように外国から、特に韓国からは少なからぬ詩人、作家、あるいは将来の詩人、作家であった若者たちがこの明治学院で学び、さまざまな足跡を残しています。それは単にここで学んだということだけではない、いろいろな意味をもっていると考えられますので、今日も日本ではあまり知られていない作家ではありますが、李光洙について我々もおおいに認識を新たにしたいと思っております。

今日、お配りしてある資料の中で、李光洙の写真が載っている両面コピーになっているものは、最近出された集英社の『世界文学事典』の李光洙のページです。実は私もこの『世界文学

事典」のフランス文学関係をいくつか執筆しておりますが、  
世フランス最大の作家と言われるクレティアンド・トロア  
りも多いぐらいのページ数が李光洙に割かれていることは、改  
めてこの作家が大きな存在であることを再認識させることの  
一つであると思います。同じく資料として、白金の一九〇九年の  
印刷物に李光洙が別の名前で書いた「愛か」という短い小説が  
あります。これを読んで非常に鮮烈な印象を受けましたが、こ  
れは同じ頃に書かれた折口信夫の処女作に近い「口笛」という  
小説など折口信夫の初期作品と、テーマなどいろいろな点で相  
通ずるところがあると思ひまして、関心を新たにしているこ  
ろです。

それではこの会の進行を芸術学科の四方田先生にお願いいた  
します。

**四方田 犬彦** 本日は県立新潟女子短期大学で韓国語と朝鮮事  
情の講座をおもちで、現在の韓国文学の翻訳をされている波田  
野先生をお招きいたしました。先生は明治学院時代の李光洙に  
ついて研究をされていらっしゃいますので、一二〇周年を迎え  
た明治学院としても、記念すべき講演としてお願いしたいと  
思っております。それではよろしく申し上げます。

**波田野 節子** 皆さんこんにちは。県立新潟女子短期大学で韓  
国語と朝鮮事情を担当しております波田野と申します。いつも  
は高校を出たての女子学生ばかりを相手にしておりますので、

それ以上の年輩の方を前にすると少しあがりませんが、不備があ  
りましたらお許しください。本日は、私が長年研究しておりま  
す李光洙につきまして、李光洙の母校である明治学院でお話し  
をさせていただくという、たいへんな名譽をあたえて下さった  
ことに對して、関係者の皆さま方に心からお礼を申し上げます。  
私が李光洙の研究を始めてからもう十年ぐらひになります。明  
治四十三年に明治学院を出た李光洙が自分の母校でこんな講演  
会が開かれたと知ったらさぞかし喜ぶことと思います。

本日、私がお招きを受けることになりましたきっかけは、実  
は今から六、七年ほど前、李光洙が明治学院普通部在学当時に  
書いたある作品について調べておりましたときに、それが当時  
の活動写真を翻案したものであることに気が付きまして、その  
映画についての問い合わせを四方田先生にしたことに始まりま  
す。その頃の私は四方田先生のお名前しか存じ上げませんでし  
たけれども、ちょうど私の友人が四方田先生の大学時代の同級  
生であることを聞き付けまして、映画に関してまったく無知で  
困っていた私は、ずうずうしく先生に問い合わせをしました。  
先生は映画に造詣が深いいうえ、七〇年代末には建国大学で日本  
文学を講じておられたということを伺っておりましたので、無  
碍にはなさらないだろうと当て込んだわけです。先生はわざわざ  
ご私に電話をくださいまして、自分にはわからないけれども、  
その領域の専門家を紹介するから、その方にコンタクトしてく  
ださい、とアドバイスをくださいました。残念ながらその映画

は結局見つかりませんでした。四方田先生のご親切が深く心に残りました。私は不覚にもそのときまで先生が明治学院にいらっしゃることを知らなかったのです、これも何かの因縁だと不思議に思った記憶がございます。

その後私は、李光洙が早稲田大学在学中に書いた『無情』という小説の研究に入りましたので、明治学院とは少々遠のいておりました。一度はこの明治学院を見たいと思いつながら、住んでおられますのが新潟で田舎者ですから、東京を歩くのが苦手ということもありますし、当時の明治学院に関しては写真などで見ることがありましたが、今行ってもどうせ面影は残っていないだろうと少し軽く考えまして、結局明治学院には足を運びませんでした。

ところが最近、李光洙と同時代で、彼のライバルであった金東仁について研究を始めました。この人もやはり明治学院の中等部に大正時代に在学していた人です。彼が住んでいた下宿のあった場所を探る必要に迫られて、今年の春に現在の白金四丁目あたりを歩き回り、そのとき初めてこの明治学院のキャンパスを拝見いたしました。自分の研究する人物が生きた場所は見えておくものだ、とその時反省いたしました。何がわかるというわけではありませんが、その人物が呼吸をした場所に立つて周囲の地形を眺めるだけでも、何か感動的なものがありました。このキャンパスは当時の雰囲気をとどめる努力をされているようですが、それでも当時とは大きく変わっております。しかし、

道路の場所、坂道の傾斜などは、やはり面影をとどめているように思います。金東仁という作家についてあれこれ調べながら、卒業名簿一つ調査するにも内部に知り合いがないと不便なものだと考えておりましたところ、また四方田先生のことを思い出しまして、先生に連絡を取りましたことが契機となりました、今日の講演という運びになったわけです。

この明治学院は李光洙や金東仁のほかにも韓国の著名な人を多く輩出しています。金東仁の自伝の一節を少し読ませていただきます。

「東京の明治学院という学校は、朝鮮人とは非常に因縁の深い学校である。明治学院朝鮮学生同窓会の名簿を見ると、朴泳孝、金玉均（ともに政治家）がその筆頭におかれており、私はその学校に在学していたときも、白南董（調べてもわからなかった）が五年生に在学しており、文一平（後に歴史学者）も明治学院出身であり、画伯の金観鎬も明治学院出身である。この金観鎬の絵が、私が在学していたときに学校の壁に飾られていたし、現在の朝鮮を担う多くの人材が明治学院を経て社会に出た」（『文学三十年の軌跡』一九四八）

この回想でもしるいのは、常に李光洙と張り合っていた金東仁らしく、ここには李光洙の名前が抜けているということ、そして明治学院時代金東仁のライバルであった朱耀翰（詩人・朝鮮最初の近代詩を書いた）の名前も落ちており、いかにも金東仁らしい回想記だと思えました。

李光洙、と言いましたも、現在の日本の方にはあまりなじみのない名前だと思いますので、まずお話しの前半で彼はどのような人物だったか、その生涯についてざっとお話しをしてから、後半部分で彼の明治学院時代についてお話ししたいと思います。ここでお断りしておきたいのは、「韓国」「朝鮮」という呼び名のことです。私は、「韓国語」を教えて、「朝鮮事情」を教えており、呼称が混乱しております。ご存じのとおり朝鮮半島には現在二つの政権があり、休戦状態にあります。人にもよりますが、一般的に私たち韓国の文学を研究している者は、一九四五年の解放——私たち日本人にとつては終戦だが、当然韓国においてはこれは植民地からの解放であり、「光復」と呼ぶ——までを私たちは朝鮮文学、——朝鮮古典文学、朝鮮近代文学と呼び、解放後の文学は韓国現代文学と呼ぶことが多いのです。例えば岩波文庫には『朝鮮近代小説選』が入っており、文庫にはなっておりませんが、同じ岩波で『韓国短編小説選』があります。ここでもそれによつて呼称させていただきますので、ご了解ください。

韓国では、李光洙、と言いますと、ほとんどの人がとにかくその名前は知っていると云うくらいに有名な人物です。例えば、学校の歴史の時間に学んだとか、国語の時間に彼の作品の一部を呼んだとか、あるいは先ほどタイトルをあげました『無情』という作品を、朝鮮近代文学の最初の長編小説として暗記するとか、なんらかの形でその名前には接する、要するに韓国の歴

史、とりわけ文学史からは抜かすことのできないという評価の定まった人物です。しかしながら、そうした教科書的な意味で重要というだけではなく、李光洙という名前は現在でも韓国の多くの知識人たちに複雑な感情を呼び起こす存在でもあるようです。既に亡くなられたキムヒョンという有名な評論家兼研究者は、李光洙について書いた文章の冒頭に、「李光洙は触れればふれるほどに血の噴き出す民族の傷口である」という意味のことを書いています。

これは具体的には、日本が朝鮮半島を植民統治した時代、特に最後の一九四〇年代に李光洙が行った対日協力行為のことを指しています。この対日協力行為のことを韓国では親日行為と呼んでおります。植民地支配がなされた場所ではどこでも、さまざまな理由から支配者側に協力する現地の人が存在したという歴史的事実がありますが、韓国においてなぜ今でも李光洙が特に「傷口」と呼ばれるのか、皆さまのお手元に配布されている略歴を見ながら、そうしたことも含めて彼の生涯についてお話ししたいと思います。

彼は一八九二年、平安北道の定州（平壤の北）で生まれました。彼が二歳の時、日清戦争が起り、朝鮮での初めての近代改革である甲午改革が行われています。一九〇二年、十歳で父母をなくし、その後親戚の家を点々とする半放浪生活を送ります。その頃、東学——西洋のキリスト教に対抗して朝鮮半島で起こった民族主義的な宗教——の教徒に拾われ、しばらく書

記として働いたことが縁となって、一九〇五年に一進会の留学生として日本に来ました。この年に日露戦争が終わっています。日本に来てまもなく、東学が分裂した為学費が中断し、いったん帰国。一九〇七年に今度は国費留学生として明治学院普通部三年生に編入学しました。この明治学院時代につきましては、このお話しの後半にまとめてお話しいたしますので飛ばします。この時代は彼が文学作品を耽読して、自分でも作品を書き始めた非常に重要な時代だということができます。

本日、「愛か」という明治学院時代に書かれた彼の処女小説が皆さまのお手元に配布されております。李光洙の処女小説は日本語で書かれたわけで、この点も後に日本語で書かれた対日協力的な作品とあいまって、韓国の知識人に複雑な気持ちを抱かせるようです。一九一〇年に彼は明治学院を卒業し、故郷の定州の五山学校に教師として赴任します。ここは当時あちこちでできました、民族の独立のために新しい知識を学び、そして民族主義的な気概を養おうという民族学校でした。途中九カ月ほどの中国、シベリア大陸放浪時代をはさんで、彼はその地で五年間教師生活を送ります。

一九一五年、李光洙は再び日本に留学し、早稲田大学予科を経て、翌年早稲田大学文学部哲学科に入学します。彼が歴史の表舞台に登場するのは、この早稲田時代です。まず留学生雑誌や故国の新聞に、民族の再生のためには古い思想を清算しなくてはいいないと、儒教を攻撃する過激な文章を次々に発表し、

当時の若者たちのオビニオンリーダーとして脚光を浴びます。

一九一七年には新聞連載した長編「無情」が非常な人気を呼び、先ほどもお話ししましたように文学史上記念碑的な作品として残ることになりました。この作品が若者の人気を呼んだ一つの大きな理由は、親の決めた相手ではなく、自分で恋愛した相手と結ばれるという、いわゆる近代的な恋愛、近代的な男女の結び付きを宣伝する啓蒙的な恋愛小説であったということにもよります。李光洙自身もその近代的恋愛を、一九一八年に駆け落ち——李光洙全集の年譜には、「愛の逃避行」というすてきな名前が使われている——という衝撃的な形で実行しています。

その後、第一次大戦終結後の民族主義の高まりを背景として朝鮮では三・一運動が起き、中国ではこの年五・四運動が起きます。三・一運動の前哨戦とも言うべき東京の二・八独立宣言を起草した後上海に亡命し、臨時政府樹立に参加するなど、李光洙は言わば民族の英雄であったわけです。これが一九一九年のことです。この二・八独立宣言文に関して、明治学院と縁の深いエピソードがありますので、紹介しておきます。一九一九年、李光洙は東京留学中の朝鮮人学生を代表して独立宣言文を起草しましたが、二月八日その朗読には立ち会わず、その前に英訳をもって上海に亡命し、それをアメリカ、フランス、イギリス各国の大統領宛に電報で伝えました。李光洙は明治学院時代から英語を鍛えられて実力はあったようですが、やはりそのような目的の英訳ですから、一度ネイティブに見てもらい

たいという必要を感じたようです。そこで以前から知っていた、あるアメリカ人宣教師に頼んだのですが、その人はちよど朝鮮に宣教に行くところなので、いまこれを見るところに合いません。代わりにはランデイス博士という方を紹介しますと答えました。

ランデイス博士は、李光洙が明治学院に在学中からいた方です。そのランデイス博士だったら私はよく知っているから紹介はいいかもしれませんと云って、李光洙はその日のうちに明治学院のキャンパスにある博士の家に行き、英文を手直ししてもらったということ。それが卒業して九年振の、初めての母校訪問だったと李光洙は回想しております。そのときランデイス博士は李光洙の頼みに快く応じてくれましたが、そのときに「愛国運動には成功も失敗もありませんよ」と言ったそうです。これは私の想像ですが、ランデイス博士は、その時点においてはまだ国力の差からして朝鮮民族の独立は難しいと考えておられたのではないでしょう。この回想を読んだ時に、私はそんなふうに感じました。

さて、彼は英文訳を持って、上海に飛びます。そこで臨時政府が樹立されましたので、それに参加するわけですが、結局二年後の二一年には上海での活動に限界を感じ、同胞と一緒に故国で運動したいと考えて帰国することになります。翌年、彼は修養同盟会を發起し、これは二六年には修養同友会という名前に変わります。略歴の一九一九年にありますように、彼は安昌

浩という興士団思想の提唱者と出会いました。興士団というのは、一人ひとりが心身を修養して経済的に自立する、一人ひとりが力をつけることによって最終的には民族に力がつき、独立を達成する、それに向かって準備する、いわゆる実力養成論、準備論といわれるものの実行団体です。彼はこの思想に出会い、故国に戻って興士団の国内版である修養同盟会をつくったわけ

です。

朝鮮の状況は一九二〇年代になりますと、一〇年代とは大きく変わりました。朝鮮を植民地にした当初、日本は武断統治というところで、武力を背景にした思想統制を厳しく行っておりましたが、三・一運動後は、武力だけではとても統治しきれないということの方針を転換し、一定の言論の自由を与えるよう、政策交換を行っていました。このとき民族紙と言われる『東亜日報』や『朝鮮日報』が誕生しています。李光洙はこの両紙の編集局長をするなど言論人として活躍し、かつ次々に長編小説を書いて成功を取めます。彼は小説家であり詩人であり言論人であり、農村運動などの社会改革家であり、そして修養同友会の責任者といういくつもの顔をもっておりました。彼はあるところ、**「自分はいろいろな活動をしているけれども、その原点は民族への奉仕であり、これに尽きる」**と書いております。このように彼は、知識人の代表格として人々の尊敬を受ける存在だったわけ

です。

しかし、一九三一年の満州事変の頃から彼の身辺には暗雲が

漂い始めます。その翌年、安昌浩が中国で逮捕され、国内に送還されてきます。戦争が近づき、内戦一体のスローガンが掲げられ、朝鮮支配の方法が変質して取り締まりが非常に厳しくなってきました。以前には修養団体として認められていた修養同友会が、盧溝橋事件の起きた一九三七年には独立を目指す団体として、治安維持法にひっかかり、李光洙ら幹部が逮捕されて、四年間裁判が続くことになりました。これを同友会事件と言います。彼の親日活动はこの後始まっています。

略歴にありますように、一九四〇年には率先して創氏改名を行い、香山光郎と名乗りました。また大東亜文学者会議で皇国臣民として大東亜精神を賞揚し、ついには東京に留学中の朝鮮の青年たちが学徒兵に志願するよう、勧誘のための講演を行ったりしました。こうした行為がいわゆる親日行為と言われているのです。この時期に書かれた作品としては、『元暁大師』は朝鮮語で書かれましたが、『彼らの愛』(一九四一年)、『加川校長』、『元述の出征』、『大東亜』などは日本語で、かつ日本の戦争遂行に協力する姿勢で書かれており、親日小説と呼ばれています。一九四五年に解放を迎えますと彼は蟄居しますが、創作活動は旺盛に続けています。彼は本当に書く人でした。一九四九年、反民族行為特別調査委員会にかけられますが、不起訴になります。しかし、一九五〇年に朝鮮戦争が勃発し、北朝鮮に連行されたあと行方不明になりました。

私が李光洙について勉強をし始めたのは今から十年くらい前

ですが、その頃李光洙は生死不明という事になっていました。皆さまのお手元にある集英社事典の李光洙の項にも「一八九二年から？」となっています。つまり、生きていたのか、死んでいるのか、どこで何をしているのかわからないという状態で、北側からの情報はまったくありませんので、さまざま噂だけが飛び交っていました。私が聞いた中でも、どこかで木訥な農民として生きていたりとか、既に亡くなり、近所の人が出ていねいに葬ったとか、少し驚いたのは四方田先生が新潮に書かれた、蛇にかまれて死んだなどというもので、いろいろな説があり、どうしているかわからなかったわけです。ところが李光洙生誕一〇〇年にあたる一九九二年の前年、現在アメリカ在住の息子さんが北朝鮮とコンタクトを取り、北朝鮮で墓参りをしてきたという記事が、その墓の写真と一緒に新聞に載りました。これで彼の死亡は一応正式に確認されたわけです。その消息によりますと、一九五〇年十月二十五日、北に連行される途中、凍傷が悪化して死亡したということです。

一九九二年、ソウルでは李光洙の生誕一〇〇年を記念する行事がかなり大規模に行われました。三月には講演会がありましたし、夏にも大きな書店のギャラリーで展示会がありました。私は三月に講演会を聞きにソウルまで出掛けて行きましたが、大きなホールに何百人という人が集まり、李光洙が現在に至るまで与えている影響の大きさというものに驚いた次第です。

先ほど引用した評論家キムヒョンの、「触れれば触れるほど

血の噴き出す民族傷口」という言葉は、彼の生涯の軌跡をこのようにたどってきてみますと、おのずから理解されるのではないかと思います。彼が普通の人であったならば、彼の親日行為もこれほどまでに傷口にはならなかったと思いますが、李光洙は非常に傑出した人でしたし、また自分の行動のすべてが民族のためであると常に言明し、実際にさまざまな面でそのように行動した人間でした。若い時には古い思想に反抗する若者のオピニオンリーダーとして、近代的恋愛を高らかに歌った作家として、上海では臨時政権に参加した独立運動家として、またその後農村運動や人格修養団体の指導者として、さまざまな面で彼は民族のために働きました。人格的にも彼は真摯な人間であつたように思います。少なくとも私は彼の文章を通して、そのように感じております。恐らく当時の多くの人もそのように感じたのではないかと思います。彼はその時代の朝鮮において、言わば精神的な指導者のような存在でした。そういう彼がいつの間にか親日行為を行い、ついに「民族の叛逆者」という名前で法廷に立つことになってしまったことは実に歴史のアイロニーで、悲劇と言わざるを得ません。このアイロニーを解くための研究が、数多く行われています。

現在、ソウル大学国文科教授で近代文学研究者の第一人者である金允植さんは、日本に二度滞在し、一九八六年に「李光洙とその時代」という三巻の研究書をお出しになりました。もちろん明治学院にも来られて、学簿などの資料を調査され、明

治学院時代に関する一章を割かれ、非常に詳細な研究成果を報告しておられます。この本の前書きで金先生は、「今でも明治学院の旧館前のイチヨウの木の香りが忘れられない」と書いておられますが、私も先ほどその前を通りながら、あ、この香りが、と嗅いでまいりました。

人間の生き方に決定的な影響を与える少年時代、その時代を李光洙はこの明治学院で過ごしました。それでは次に、彼が明治学院で過ごした時代についてお話ししたいと思います。この前に準備してあるビデオを一分ほど見ていただきます。このビデオは一九九二年の李光洙生誕一〇〇年を記念して、八月十五日の解放記念日の特別企画番組としてMBCが四日間に渡り放映したもので、李光洙の生涯を描いたものです。先ほど申し上げましたように、李光洙は叛逆者というイメージが非常に強かったので、私が李光洙を研究していると言いますと、十年前には韓国人から少しうさん臭い目で見られたようなこともありましたが、このあたりから少し見方が変わってきたような感じがします。「韓国の成熟」というと、韓国に失礼になるかもしれませんが、時間がたつて落ち着いたのかも知れません。それにしても、彼が「傷口」であるという事実には変わりなく、このドラマもちよつと複雑な作り方になっています。つまり、ドラマ製作者が彼の生涯をドラマとして編みながら、彼の友人と彼の生涯について話し合う——一人は、彼は叛逆者だったという立場、それに対してもう一人は、それだけではなかったの



ではないか、歴史とはもつと複雑なものじゃないのだろうか、という立場で、二人が語り合いながら番組が進行するという形式になっています。そのドラマの一部を一〇分ぐらいにまとめましたので、説明を聞きながら見ていただきたいと思います。

……ピテオ……

李光洙の子ども時代、孤児になって市場でタバコ売りをし、やがて東学の人に出会ってスカウトされる場面です。一九〇七年、明治学院時代です。登場人物はみんな日本語を話しますが、かなりつたない日本語ですので、よく聞いてください。李宝鏡リホウキョウというのは李光洙の幼名で、彼は李宝鏡という名前で明治学院に在学しました。山崎俊夫という同級生は、李光洙にトルストイを紹介した人、として描かれています。次は明治学院を卒業した李光洙が五山学校に迎えられる場面です。学生たちが歌っている歌は、この日のために学生たちが作詞したものだそうです。彼はこのとき満で十八歳でしたが、やはり故郷の英雄だったわけです。次は早稲田大学時代に彼が文部省美術展覧会を見に行つて、明治学院の先輩でもある金観鎬の「日暮ひぐれ」という入選作を見ている場面です。この人は朝鮮の絵画では有名な人です。さて最後は李光洙が二・八独立宣言文を持って亡命しようとしている場面ですが、その場面を映しながら制作者とその友人が、「民族反逆者と言われている李光洙にもこんな時代があつ

たのだな」と語り合っています。

それでは李光洙がこの明治学院で過ごした少年時代のことをお話ししたいと思います。彼は一九〇五年に初めて日本に留学し、いろいろな事情でいったん帰国した後、一九〇七年の秋に明治学院普通部に入学しました。三年生の二学期、三学期、四年、五年と、二年半を明治学院で過ごしたわけですが、それまでは学費の問題などもあつたのですが、明治学院に入学してからは政府から学費を支給されるという理想的な形で経済的な問題が解決し、彼はこの二年半を精神的にも余裕を持って過ごしたようです。先ほど年譜でも見ましたように、彼は三十歳まで激動の生活を送りますが、それだけにいろいろなものに接して、教養を得たこの二年半の落ち着いた時代が、彼には非常に重要ではなかつたかと思えます。そのせいでしょうか、李光洙はこの時代に関してさまざまな回想を残しています。

少しその例を挙げますと、一九三六年に書いた「彼の自叙伝」という回想録では、「このM学校（明治学院）はキリスト教長老派系統の学校で、神学校とカレッジと中学校の三つが一つの校内にあり、アメリカ人の先生も何人かいて、いわゆるミツションスクール風の風のある学校だった」、神学校とカレッジ、中学校というのは、高等部と普通部のことだと思えます。李光洙はここで初めてキリスト教と出会いますが、そのことをこのように語っています。「私はこの学校に入学して初めて聖書というものを学んだ。見るのも初めてだった」と。特に「マタイ福音」

を初めて読んで、ラクダの毛を編んだ衣を着て川辺で、「悔い改めよ」と叫ぶヨハネの姿に非常に感銘を受けたようです。このイメージは彼の想像力を刺激し、かつ指導者願望に火をつけたようで、自分がヨハネと同じ格好をして大同江のほとりに立ち、「悔い改めよ、汝ら朝鮮人たち」と叫ぶ姿を想像していません。

しかし、一九一〇年の日韓併合を目前にしているこの時代です。すから、日本人教師に関しては反発心の方を先に出しています。例えば、「もしHという聖書の教師がもう少し宗教的な人物であつたら、私はもう少し感激したであろう。だがH先生は聖書を教えながら国家主義ばかり宣伝した。それが私の気に障つた」と書いています。しかし、アメリカ人であるW先生、これはたぶんワイコフ先生のことではないかと思いますが、その人は人格的に非常に尊敬したようです。「一人、Wという老アメリカ人教師だけが真にイスエの教えを信じ、イエスの言葉のとおりに行動しているように見えて、私は彼を非常に尊敬した。彼は赤ら顔で頭が白く、背が高く、いつも穏やかな顔付きと態度で我々に接した。彼は決して怒ることがない。しかし、笑いもしなかつた。非常に言葉数が少なかつた。彼は「バイブルストーリー」という本を英語で教える教師だったが、私は彼から習つた『バイブルストーリー』については忘れたけれども、彼の穏やかな態度、慈悲深い表情を忘れることはできない」と語っています。

自分のクラスについておもしろいことを書いてるので紹介します。「我々のクラスには悪ガキがたくさんいて、M学校創立以来もつとも騒ぎを起すクラスだと、学校当局では目を光らせていた。我々はストライキこそやらなかつたが、学校で石炭を十分につれないからと言って先生の椅子を壊して暖炉にくべてしまつたり、いやな先生の時間には部屋中を石炭の煙でいっぱいにしてその時間は休講にさせたり、このほかにも先生泣かせのことをおおいにやつた」となつかしく語っています。そういう悪ガキたちのクラスの中に、二人とてもいい模範生がいました。「そんな中で山崎は実に聖徒のように端正な少年だつた。山崎は丹羽という生徒と並んで我が校の模範生だつた。丹羽という生徒は牧師の息子で、今ではかなり有名な牧師になつている」と、丹羽と山崎という二人の名前を挙げておりますが、この山崎という生徒が先ほどビデオで李光洙にトルストイの本をくれた、あの山崎俊夫です。山崎俊夫に関して李光洙はいろいろ書いています。「山崎も現在では相当名のある文士であるが、彼は私よりも一歳年上で顔立ちがよく、キリスト教徒の家庭で育つて、心身と行いがきれいな人間だつた。私は山崎と親友だつた。我々は放課後になると、他の生徒の群れには交じらず、運動場の片隅に一緒に腰を下ろして聖書の話をした。私たちは戦争を否認し、殺すなかれ、というマタイ福音で学んだ言葉をそのまま信じ、トルストイとともに非戦論者だつた」と書いています。このほかにも、この山崎が非戦論を主張する

のではかの蜜カラの学生から鉄拳制裁を受けたけれども、彼はついに抵抗しなかったというエピソードも書いているのですが、どうもあまりに出来過ぎではないかという気がします。

このように彼は明治学院に入学してキリスト教に出会い、トルストイを知り、キリスト教的な理想をもって清らかな生活を送りたいと、最初は考えたようです。しかし、そのあといろいろな本を読んで彼もだんだんと考えが変わっていきます。前半にはトルストイ、木下尚江、特に木下尚江の『火の柱』には感銘を受けたということを書いていますが、後半になりますと、自然主義の文学をたくさん読み、バイロンに心酔したりして酒を飲み、そして「吉原にも出掛けた。自分は汚れた」とも書いています。この頃の彼は快樂至上主義、本能満足主義という言葉に心酔していたようです。

皆さんのお手元にお配りしたのは、『富の日本』という雑誌に李光洙が李寶鏡という名前で投稿した作文です。「明治学院普通部第五年韓国留学生李寶鏡」とあり、左側にはこの時代の李光洙の写真が載っています。この作文を読みますと、「快樂は吾人生存中の最大全体の目的である」とか、「快樂こそが人間の存在の目的だ」とか、「本能を満足させるのがよい」というような、いかにも高山樗牛あたりを思わせるような言辞を弄してあります。いま引用している『彼の自叙伝』という回想録の明治学院の頃の終わりに、「私は毎日山崎君と会ったけれども、山崎君は相変わらず清潔なままであるのを見るたびに、本

当に恥ずかしいと思った。けれども私は、山崎君が幼稚なのであって、私の方が先に進んでいるのだ、と自分をなだめた。たぶん山崎君は私の魂の中に悪魔が潜んでいることを知らなかっただろう」と書いてあります。

あくまでも清潔で清らかで天使のような山崎像、という山崎俊夫の姿が浮かんできますし、私もそういう人なのかと思っていましたが、これもお手元にお配りしてありますが、山崎俊夫が卒業四年後に書いた『降誕祭前夜』という小説を読んで、仰天しました。これは「私」というのは自分、相手が李寶鏡、まさに明治学院の李光洙を主人公にした少年愛の世界を描いたものです。山崎俊夫に関しては一度『白金通信』で記事にされたことがあります。それを読みますと山崎は「李光洙がキリスト教を教えてくれた」と語っています。李光洙と全く反対のことを言っているわけです。『降誕祭前夜』という作品には朝鮮人蔑視の感覚があちこちにあらわれていると感じますが、これは特に山崎俊夫にそういうものがあつたというのではなく、むしろこういう表現が当時の日本人には普通であつたのだろうと作品を読みながら感じ、その意味でますます胸が痛みました。どちらにしろ李宝鏡という実名をこういふ小説に使うというのは失礼なことだと思いますが、山崎俊夫はそういうことをしたわけです。李光洙が山崎俊夫のことをほめておきながら、そのあと早稲田時代には山崎と会った形跡がないことを不思議に思っていました。こういう小説を書かれたせいかな、とも考

えました。ところで、皆さんにお配りしたコピーは帝国文学の方ではなく、奢瀨都館から出ている『山崎俊夫全集』の中巻からとりました。奢瀨都館では来年あたり別巻として山崎俊夫の日記などの資料集を出すそうですので、私の疑問も少し解明されるのではないかと楽しみにしているところです。

ところで、李光洙はこの時代の日記を残しており、日記と言いつても一九二五年に雑誌に発表されたものですから本日の日記ではなく、かなり手を加えられているだろうということが推測されますが、一九〇九年十一月から一九一〇年二月まで、まさに明治学院時代の最後の三ヶ月の日記です。それを読みますと、彼の心が非常に激しく揺れていることがわかります。一九〇九年十一月には安重根による伊藤博文暗殺事件があり、チャペルでの祈祷で、「大日本帝国のために伊藤博文のような人物を遣わしたまえ」という言葉があったことに非常に憤激したとか、祖国の植民地化が目前に迫っている危機感が、日記を通して感じられます。ただし、明治学院の名誉のために付け加えますと、先ほど紹介した金允植さんは『李光洙とその時代』の中で、「当時としては仕方ないことで、明治三十二年、明治学院が徴兵猶予の特権を返還してまでキリスト教の理念による教育を守ろうとした経緯を考えれば、この学校は決して国粹的な学校ではなかった」と書いておられます。

さて李光洙の日記の中には、「勉強がいやになった、やめようか。いや、もうちょっとしんぼうしよう」とか、あるいは唐

突に、「朝鮮にはまだ文芸がないから帰っても仕方がない。日本に残って日本の文壇で活躍しようか」と書くなど、千々に乱れる心が感じられます。こうした動揺の中で彼は処女作『愛か』をはじめいくつかの詩や短編をあらわしました。卒業を目前にした彼は、明治学院の学校誌十二月号『白金学報』に少年愛を描いた作品『愛か』を発表し、これが彼の処女作となったわけです。李光洙はこの作品を完成させたうれしさを日記にも書き付けています。

李光洙にとって、明治学院で過ごした時代とは一体なんであったのでしょうか。なによりもそれはキリスト教との出会い及び文学との出会いでもあったと言えらると思います。あるいはキリスト教というより、崇高な理念への尊敬心をもつことで自分の人格を修養しようという考えを得た時代であったと言いかえることもできます。もちろんこれはそれ以前に出会った東学の影響も考えられるわけですが、この崇高な理念への尊敬心が、後の修養団体による民族自強運動へと結び付いていったと考えられます。文学との出会い、さまざまな煩悶の中で、李光洙が朝鮮語と日本語で創作を始めた時代、それが明治学院における彼の少年時代であったということができるといえるでしょう。

**四方田犬彦** いま、波田野先生から李光洙の生涯を説明して頂きましたあと、明治学院において彼はどのようなことを学び、あるいは思想的な文学的な変遷を体験したか、あるいは交友関

係などについて、非常に端的に興味深く語っていただきました。MBCの特別記念番組の活動弁士も務めていただきました。映画史的にも感謝しております。

これから、ここにいらっしやる皆さま方、中には朝鮮文学の専門的な研究者のお顔を拝見しておりますが、質問あるいは意見などをいただきたいと思えます。まず私の方から、波田野先生にお聞きしたい素人としての質問が二つほどございますが、先生、よろしいでしょうか。

私の個人的な知り合いで、梨花女子大学で英文学を長く教えられたある方が、一九四五年の光復のときから一年ほどソウルに蟄居していた李光洙自身に英語を習っていたという話を聞いておりました。その方のおぼろげにあたる羅惠錫という方は、後に朝鮮人で最初にパリに留学した洋画家になります。あの人も一九一九年に東京で交流されたりしているはずですが、姪御さんはこの間まで韓国英文学学会の会長を務められた方で、そもそも英語を志すきっかけは、高校時代に李光洙氏に英語の手ほどきを受けたことだということです。その方とこのシンポジウムの話をしましたら非常に喜んでおられ、自分が女学生時代に李光洙先生に会ったときの印象は、とにかく白哲であったというのと、目が非常に薄いブラウンのような感じの透き通るようなまなざしをもっておられた方で、私たちもひよっとしたらあの先生は混血か何かではないだろうかという噂をしていた、ということですね。

この山崎さんの小説を読みますと、「宝鏡は金髪青眼の背の高い少年で……」と書いてありますが、このへんはどうなのでしょう。金髪というのはフィクションかもしれませんが、まなざしのことなど容貌は、例えば彼の出自や孤児としての来歴と何か関係があるのか、彼はそういうふうなことから何を受け取っていたのか。文学的あるいはロマン主義的に彼はどのような信念を受け取っていたのかということについてお話しをしていただけますか。

**波田野節子** 彼は自分の容貌に関して意識していたようです。あるところに学生たちがコンパのように集まったときに、ふと鏡を見て、ああ、美しい、と自分の顔に見とれた、という一節が日記にありましたので、自分でもハンサムだということは自覚していたようですが、目の色の事は書いていません。ただ、それに関して確かにあちこちで聞きます。李光洙の生涯を書いたある作家は、「金色の光る目」と書いていますし、山崎俊夫も、亡くなる前に柳尚熙さんという方がたずねて行ったときに、「彼は目が青かった」とはつきりと言いつ残しておられます。私がかねてから不思議だと思っているのですが、いまのところ決定的なこととはわからないので、それがいかなる影響を李光洙に与えたのかということについてもわかりません。

**四方田犬彦** 「愛か」という作品は美少年小説で、しかも金髪青眼と書いてあるものですから少女漫画的な発想からお聞きしたかったのですが……。もうひとつはもう少ししなやかな質問

ですが、明治学院時代にトルストイの後に木下尚江の影響を受けるわけですが、その頃は木下尚江がちょうど四十歳ぐらいで、足尾銅山の公害反対運動や娼婦運動をしたり、幸徳秋水などと組んで社会的な行動をし、それがいろいろな妨害にあつて、そして小説に専念しようとしていたという、彼にとつても転機なわけです。今日のために私は「火の柱」を読んできましたが、これは勧善懲悪小説ですが、社会主義者や共産主義者がたくさん出てきて、悪徳地主のようなキリスト教の中での内紛など、非常にヴィヴィッドな内容の小説ですが、その木下尚江からどのようなことを李光洙は受け取ったのかというようなことを教えていただきたいのですが。私の考えでは、木下尚江はキリスト教というよりはむしろ社会主義の方に関心をもっていた知識人ではないかと思いますが、李光洙自身は社会主義や共産主義を木下を通して得ることはあつたのでしょうか。

**波田野節子** 以前、私が書いた論文でその問題に言及したことがあります。李光洙自身は木下尚江の小説からこういうものを受け取ったと書いています。「彼の小説によつて自分は初めて『主義』の高尚な甘味、奮闘への欲望、恋愛の純味を知った、つまり信ずるものがあるということの大切さ、そのために戦うことの大切さ、そして恋愛を知ったということを書いていきます。ただ、『主義』が社会主義であつたとは思わないのです。彼はキリスト教とも出会いながら、キリスト教の真摯さ、ウソをつかない、だまさないというようなところは受け取つていて

もキリスト教徒にはなりませんでした。いろいろなものに出会つても、必ずしも本質的にそちらの方に傾斜したような感じはしません。ただ、常に真摯であれ、というところだけをとっているような気がします。やはり、自分の信ずるもののために戦うという、そういうことではなかつたかと思えます。それと、もちろん恋愛です。

**四方田犬彦** 私は全然知りませんが、吉原に行つた、というところをもう少し……。

**波田野節子** 李光洙の名誉のために付け加えますと、自叙伝には、「吉原に行つたけれども、お化けのような顔を見て驚いて帰つて来た」と書いてあります。

**四方田犬彦** ご質問あるいはご自身でおもちの李光洙観についてお話しをしていただける方がいらつしやれば、マイクをお持ちいたしますが。

**質問者A** この学校との関係で、彼は明治学院を志願したのか、それとも行くように言われて来たのでしょうか。もう一つは、韓国側の何かの留学生なのか、日本政府サイドの留学生だったのでしょうか。

**波田野節子** 先ほど申し上げましたように、まず最初は東学という宗教団体の奨学生として来日したのですが、東学が分裂騒ぎになつて学費が中断して帰国します。ところが彼だけではなくそうした留学生がたくさんおり、彼らが何とか学費を出してくれという運動をしました。大学に留学していた人の中には

指を切ったりと、かなりセンサーショナルなことをやったので、感銘を受けた高宗皇帝の勅令により、大韓帝国の政府からお金が出ることになったそうです。そこまではわかるのですが……。

**質問者 A** 何年聞いることができるのかとか、そういう予定が自分であったのかどうか。

**波田野節子** 一応、普通部だけだったようです。「もしこのまま自分が高等学校へ行くのだったら学費を出すという人もいたけれども自分は断った」と、どこかで書いてあるので、学費は普通部までだったようです。

**質問者 A** 私の父もそうですが、その当時はそういう篤志家が結構いたのです。もう一つ、この学校でキリスト教の精神に触れるわけですが、少年期ですから、明治学院の精神がいつまで残るのか、いつ消えていくのか、それが作品の中で出ているものはありますか。

**波田野節子** 明治学院を卒業して五山学校に行きますが、その後すぐに、「東京時代の自分は現実遊離した思想に浮かれていたにすぎない」と自己否定しています。祖国の現実を目の前にして、違う考えになるのです。しかし、早稲田大学に留学すると、また以前と同じような考え方に戻るところもあります。結局奥のところですと残っていたのではないかと思えます。

**質問者 A** 思春期ですからね。私は早稲田だったので、そのときに少し触れた面がありました。先生の論文は入手することができのでしょうか。

**波田野節子** 「朝鮮学報」という学会誌に何度か発表しておりますので、バックナンバーをお求めになるか、図書館にはあるかもしれません。

**満田郁夫** 日本語で書いてあるのは、「愛か」から始まって日本での留学時代のものとは先ほどの親日小説ですか。

**波田野節子** 私が目にしてるのは、明治学院時代では「愛か」とこの作文です。日記は一九二五年に「朝鮮文壇」という朝鮮の雑誌に朝鮮語で発表されています。本来は何語で書かれたのかわかりません。

**天沢退二郎** 「愛か」については、最初に折口信夫と比較できると言うことを言いましたが、これはいわゆる少年愛の小説と言えるものですが、「口笛」など初期のいくつかの短編でも少年愛のテーマが中心になっておりますが、折口信夫の場合にはホモセクシュアリティが生涯を通じてあるわけですが、李光洙の場合にもそういうことはあるのでしょうか。

**波田野節子** この「愛か」を一番最初に発掘されたのは早稲田の大村先生ですが……。

**四方田犬彦** これから研究しなければいけないということですね。

**波田野節子** 必ずしも彼にそういう性向があったという気はしないのですが……作品にあらわれているかどうかとも難しいところですね。もし本当にそういう性向があったとしても、社会的な制約が強ければなおさら作品には出さないとということになる

と思います。だから、かわりに近代的な恋愛小説をたくさん書いた、と逆に考えるところなのですが(笑)。作品では「愛か」だけだと思います。ただ、そう言われてみますと、例えば丹齋(申采浩)という思想家は最後まで思想を曲げず、獄中死した人ですが、その人のことを李光洙は「私は彼を本当に愛していた、恋人のように心から愛していた」とある回想記に書いています。こういうふうを書くのかな、と回想文を読みながら驚いたことがあります。

**四方田犬彦** これは突飛な発想かもしれませんが、稲垣尼穂の同時代人としての李光洙、と考えて見ますと、例えば一九〇〇年代の男子校でそういう風習があるというのは、別に李光洙がどうのこうのということではなく、「トーマの真相」ではありませんけれども、ギムナジウムとカリセ、どこでもそういうことが普遍的に状況に応じて起きるのではないかとか、そういうことかなとも思ったりするのですが。

**波田野節子** ああいう小説を『白金学報』に発表できるような雰囲気か明治末期のこのキャンパスにあったのか、むしろそこからへんを知りたいくらいです。

**四方田犬彦** マイクロフィルムで『白金学報』などを見えますと、もって天下国家を論じるような壮士のような文章が続いていたりする中で、李宝鏡君が日本語弁論大会で一位になりました、という報告があったり、かなりまじめな雑誌です。その中に創作が載るといっただけでもすごいわけですが、美少年小

説が特別扱いで出てしまうのは、すごいと思います。

**波田野節子** お配りした李光洙の作文ですが、「前略」で始まり、「下略」で終わっている、たぶん長くて内容も過激な作文だったのでないかと想像するのです。文章はそれなりにいいけれども、全文を載せるには長すぎる、落選させるには惜しい、と編集者が考えた跡ではないかと私は想像しました。自分の考えを素直にさつと文章にしてどこでも送ってしまう人だったのではないのでしょうか。

**質問者B** 社会学科四年生、韓国人留学生ですので興味があったので来ました。いろいろと話を聞いて勉強になったと思いますが、私の身近な知識の記憶では、李光洙という人は純愛を求めた小説家であつたと思っています。だいたい前にある評論家が、李光洙は純愛を求めた人物だつた、と言っていました。この人は激動の時代を生きた一人の人物として心の揺らぎも非常にあつたと思いますが、それについて個人的なご感想を聞きたいと思います。

**波田野節子** 韓国での李光洙は「恋愛を描いた作家」というイメージがあります。軟弱、というところまでいくと申しわけないですが、そういうイメージも少しあると聞いております。私が最初に李光洙の作品を読んだときは、何か偽善家ほくて、えらそうなことばかり言うし、人を教えるようなことばかり言うし、反発を感じて好きではなかつたのです。ところがそのわりに小説は最後まで読めるのです。申しわけないのですが、韓



国の小説は途中で読みたくなるものが結構多いのですが、李光洙の作品は最後まで本が離せず、つい夜を明かして読んでしまうのです。この人は小説家としては力をもった人だと感じましたが、それにしてもあちこちにある啓蒙的な匂い、人に教えようという態度や、高みから見下ろすような感じには非常に反感を覚えました。しかし研究を続けているうちに、彼は非常にまじめな人柄で、そういう姿勢も、これが大切だ、こうすることが効果的だと心から信じてやっているのではないかと考えるようになり、逆にだんだんと尊敬するような気持ちになったのが、研究を始めて六、七年ぐらいでしょうか。韓国では李光洙に「先生」を付けて呼ぶ人が多いのですが、以前は抵抗があつて、私はそう呼ぶ気になれませんでした。それが今では抵抗がありません。

#### 四方田犬彦

韓国では中学生ぐらいで読みますか。

#### 質問者B

確か教科書にも載っています。

さい。

#### 垂水千恵

非常に興味深く拝聴させていただきましたが、私は韓国文学については素人ですので的外れの質問かもしれませんが、二点ほどお伺いさせていただきたいと思えます。まず、彼が一九四〇年代にいくつか日本語で親日小説を書いているということですが、これはどのような性格の掲載誌に載ったものであるのかということ、経歴を見ておきますと、非常に民族

意識の強い人が親日行為に走ったということは、先ほど反逆という言葉を使われていましたが、転向というか、本当に方向転換だったと思えますが、そういう大きな転向をした内的な動機のようなものがそれらの小説からうかがわれるのかどうかという点について教えていただきたいのですが。

#### 波田野節子

非常に難しい、でもいい質問をいただきましたが、申しわけないのですが、いま資料がなくて具体的な名称が出てこないのです。四〇年代になりますと、韓国語で書いた作品そのものが発表をほとんど禁じられるという状態ですので、日本語でないと発表は難しかったわけです。雑誌の他に単行本もあつたように思います。「国民文学」というような、ほとんど日本語だけの雑誌にも出ています。いま資料がなく、この場でお答えできなくて申し訳ありません。

二つ目はもっと難しい転向に関する質問ですが、そこはまさに私も知りたいところです。どこから間違つてここに来たのかということとは、それこそ本人も周りの人もそう感じたのではないかと思うのですが、その歴史状況の中にいないと分からないのではないのでしょうか。一つ、もしかしたらと思うのは、外側から見ますと、先ほど述べた同友会事件では彼のほかにも彼の仲間が数多く検挙され、裁判が四年間続きましたので、そうした裁判の帰趨と彼の行為はもしかしたら関係があつたのかもしれないという考えられる節もあります。彼が解放後に書いた、自分はこうしてそういう事をしたかという文章によりますと、

「協力しても協力しなくても、結局は協力させられる、何があっても自分たちは協力させられるのだ、それだったら犠牲をたくさん出して最終的に協力させられるよりは、むしろこちらから進んで協力をすれば犠牲者は少なくてすむ。協力することによって内部に食い込んで自分たちの力もつづけることができる」とも述べています。また、本当にそういう計画があったかどうかはわかりませんが、「総督府の方で虐殺名簿をつくっている。そんなことになって知識人の大虐殺が行われたら、朝鮮民族の将来が困る、そのことを恐れた」と書いていますし、協力しないときには朝鮮人子弟は学校に入ることを許可されなくなり、大学に進めなくなって朝鮮民族に知識人がいなくなるという恐怖感ももっていたようです。

**質問者C** いろいろ勉強させていただきましてどうもありがとうございました。いまのことに関連して、李光洙が四十歳のときのことですが、一九四二年の第一回大東亜文学者大会を前後にして、小林秀雄たちが京城に行つて李光洙と対談をしたことが連日当時の『京城日報』に掲載されています。それはもとの資料を見ない限り、韓国の資料集にはたぶん日本語で書かれており、『京城日報』に発表されているものですから目にすることは非常に難しいと思いますが、そのときの対談で李光洙は本当に真剣な顔をして、「これから作文を発表するときに韓国語ではもう書けない状態だから日本語で書いた方がいいですか、本当に日本語で書かなければならないんですか」ということを

相談のように聞いているのです。

**波田野節子** 李光洙が小林秀雄に対してですか。

**質問者C** はい。何人かの文学者たちとの対談です。その答えはやはり、日本語で書くべきだということだったのです。

**波田野節子** 小林秀雄がそう答えたのですか。

**質問者C** その対談で答えています。これは親日行為とはまた別のレベルの話かもしれませんが、私自身は韓国人で、悲しい話でもありますし、私自身これをどう位置づければいいか、どう理解すればいいかというものが、一つ自分に対する問題意識の原点になっているようで本当に迷ったりもしますが、李光洙自身の当時のことを考えると、李光洙は民族主義者としての指導者の位置にもあつた人ですが、基本的には物書きだった、表現者だったと私は思いたいのです。筆を折るというよりは、なんらかの形でも表現していきたいというようなことが、まず根本的にはあつたのではないか。それは例えばいまの親日文学や、韓国でも徐々に日本語で書かれている植民地時代の文学者たちの成果を少しずつでも理解しなければならぬのではないかと、いう動きは少しずつあります。表現者としての李光洙の本音というか役割というか、自分が自分に向けている姿勢のようなものをもう少し評価すれば、全体的な親日行為への糸口のようなものが見えてくるのではないか。私自身納得できない部分もありますが、表現者としての李光洙にもう少し焦点を当てて考えればどうかということを、私は思ったりします。

明治学院大学には李光洙の八年後ぐらいにも朱耀翰という有名な詩人や金東仁が留学してきますが、明治学院大学は韓国の近代文学者にとっては非常に大切な青少年時代を送った場所ですので、先生は当時の植民地知識人が日本語で表現せざるを得なかった悩みを、評価の面でどういうふうにお考えになつていらつしやるのか、あるいは韓国での少しづつではありますけれどもそういうことに対する評価の方向づけのようなものをどのようにお考えになつていらつしやるのか、少し長くなりませんが、おたずねしたいと思います。

**波田野節子** これも非常に難しい問題で、卑怯なようですが、私の手に余る、私には解決不能だと最初から遠ざけていて、あまり研究していません。私よりも若くてもっと力のある方が、最近きちんとした姿勢で研究を始めておられます。本当のことはだれにもわからないと思いますし、同じ状況下で一体どう行動するか本当に難しいことだと思うので、あとからなんとも言えないことだと思います。今までは研究がなされてきませんでした。既に研究が始まっておりますので、そういう方々にお願したいと、実は考えています。

ただ一つ、表現者としての、というお話しであれば、実は彼が日本語で書いた小説は未完で終わることが多かったということがあります。それが彼の表現者としての良心のあらわれ方だったというか、そういうふう解釈することもできるかもしれません。

**満田郁夫** いまの方のお話しを興味深くお聞きしました。表現者として、ということはあるのではないかと思います。私は中野重治を研究しているのですが、一九三二年にやはり治安維持法違反で入獄し、牢屋で病死するか、あるいは運がよくて生き延びることができても、ずっとそのまま牢屋にいろのがいいかどうかということになり、結局転向して出所し、父親は筆を折れと言うのですが、書いていきます、と答えます。そのうち執筆禁止で書けなくなりますが、機会を見ては書いて、表現者としての道を開くわけです。小林秀雄との論争もあります、中野重治は朝鮮と非常に縁の深い作家で、お父さんが朝鮮総督府に勤めていたとか、妹さんが朝鮮の作家である金龍濟と恋愛をし、その金龍濟はプロレタリア作家でしたが、やはり親日小説を書きます。同じ支配者ですから、この当時のことを考えるときは日本のことと同時に考えなければいけない、日本のことを考えるにも朝鮮のことを考えなければいけない、日本のことを思いながら、お話しをお聞きいたしました。どうもありがとうございます。

**波田野節子** 日本のことを考えるにも朝鮮のことを考えなければいけないというのは、本当に私もそう感じております。日本文学を日本でだけ見ているときと、朝鮮の方から見るときとは少し違った面が見えるような気がします。

**天沢退二郎** いま話題になつてくることは、この李光洙という作家が表現者として日本語を選ぶということ、特に一九四

○年代の親日行為としての日本語の作品を書くときに、なぜ日本語を選んだか、日本語で表現したかということについては、そうせざるを得ない、あるいは植民地統治の非常に強力なプレスチャーがあつて日本語で書く以外にない、日本語で書いてなんとか朝鮮民族の知識人としてのさまざまな行為を追求していくほかないという苦汁があつたと思いますが、「愛か」という作品を明治学院で書いたとき、これは小説を書き始めたときですが、このときはまだ日韓併合の少し前であり、日本の植民地経営が一方的に追求される一九三〇年代、一九四〇年代から四五年来るとときは当然事情が違うわけですが、そのころで李光洙が表現者として日本語で書いたということは、近代の世界各地のいわゆるクレオール文学、クレオール言語にも通じるところがあります。「愛か」は日韓併合直前の一九〇九年に日本語で書いたわけですが、これを我々が読みますと、日本語を少し学んでいきなり書いたというものではなく、この人の日本語教育は日韓併合以前にも既に追求されているわけです。ハイティーン時代の表現者李光洙が日本語を選ぶ意識のようなものについては、日本へ留学したから日本語で書いたということも少しはあると思いますが、それで初めて小説を書いたということ、文学者として表現者として日本語を選ぶということ、何が彼を突き動かしたのか、お考えがありましたら……。

**波田野節子** これを書いたときには「白金学報」に送るために書いたとは思えないふしがあります。日記には「愛か」を

完成させた。うれしい」そしてしばらくして、「これを「白金学報」に送ろうと思う。載せてくれるかどうかかわらない」という一節がありますので、初めからこれを「白金学報」で誰かに読ませたいという気持ちがあつたわけではないようですが、それでもやはり朝鮮語で書いて発表する場所もなく、当然読んでくれる人もいない、読んでもばかにされるかもしれないというときに、やはり書いたからには読んでもらいたいですから、そうすると日本語になるということが一つあります。それと彼は日本語を通して文学に接しましたので、題材によっては日本語の方が書きやすかつたのかもしれない。そのへんは私も知りたいところです。例えば、このあとの金東仁ははっきりと、「まず日本語で書いた、それから朝鮮語に翻訳した」と、該当する朝鮮語がないことで苦しんだことを回想しています。しかし、李光洙はそういうことを言うどころか、同時平行的に書いた朝鮮語の文章も非常にすらすらと書いてあつてあまり問題はないので、私は天才ではなかつたかと思うぐらいです。「愛か」は日本向きに書いたというのはおかしいですが、これを当時の朝鮮人留学生雑誌には載せられないのではないか。あまりにも当時の雰囲気が違うので、発表するのであれば、やはり日本人に見せたい、だから日本語、と。いま思いついただけの考えですが、そうではないかと想像します。

**天沢退二郎** 朝鮮の人にとっては日本語はもちろん母国語ではなく、これは一種のクレオール言語ですが、クレオール言語

が文学言語として成立していくには、あるところを踏み越えな  
いと文学言語にもならないわけです。そここの踏み越え  
が李光洙においてはどのようになされたのかということが私の  
知りたいところですが、それは李光洙のみならず当時の朝鮮の  
若い文学を志す人たちが日本語でたくさん小説を読んだ、日本  
の文学作品を読むことで文学言語に目覚めていくということが  
あったとすれば、それは一つ、なるほど、と思うわけですが、  
そのへんについては李光洙のさらに先駆者たちも恐らくいると  
思うので、朝鮮人にとつての日本語が文学言語として成立する  
成立過程のようなものを知りたいのですが、これはもう少し幅  
をとつて学ばなければならぬことだろうと思います。どうも  
ありがとうございます。

**四方田犬彦** 大問題がいろいろ出てきました、これからみ  
んな勉強しなければ、という感じですが、時間も迫つてまいり  
ましたので、最後にもう一方ぐらゐ質問がありましたらお受  
けいたします。

**黒川創** 遅刻いたしましたので講演内容と重複があったら申  
しわけなのですが、『愛か』の小説を読み返しても不思議な  
感じがするのは、この操という相手の男性を下宿屋のような寄  
宿舎のようなどころにたずねて行きますが、どういう空間の中  
で彼らが行き来しているのか、これはむしろ四方田さんにか  
がった方がいいのかもしれないのですが、そのことと、今日の  
資料の中の『白金通信』の中に、「熊谷直正と思われる美少年

云々」という記述がありますが、この方たちはどういう人物か  
ということを知りたいのですが。先ほど出ていたお話しで  
思い浮かぶのは、寄宿舎のホモセクシュアリティのようなも  
のは、ちょうど日露戦争から鴉外が帰つて来て『冏々・セクス  
アリス』を書く少し前ぐらいですが、発禁になると言つてもや  
らせのようなもので、勲章も出さなければならぬので一月ぐ  
らいタイムラグをおいてから発禁になります。そういう空気  
あるいは壊乱のようなものもあるような雰囲気の中で書かれた  
のかということには思いましたが、先ほどの小説の中の  
の空間のようなことを教えていただければと思います。

**波田野節子** 当時の韓国留学生の住環境ですね。四方田先生  
は確か寄宿舎とお書きになっていましたが、たぶん一軒の家を  
借り切つて、一人の下女をおいて掃除、炊事をしてもらうとい  
う生活をしていたようです。私も知りたいのですが、韓国の留  
学生たちは時々そういうことをしたようですが、日本でもそう  
いうことはやっていましたでしょうか。

**四方田犬彦** 私が魯迅の伝記を書いていたときに、「支那留  
学生二万人」と言われていた頃にどんなところに住んでいたの  
かということに顔を突っ込んだことがあります。やはり大き  
な下宿屋を借りるとか、彼の場合は兄弟がいましたのでみんな  
で借りて、そこに女中さんとかお手伝いさんと呼んで、す  
るとそのお手伝いさんと弟が結婚してしまつたとか、そういう  
ことになってしまふわけですが……。

**波田野節子** 日本人もそういうことをしていたのでしようか。

**四方田犬彦** それは『東京のアジュール』という研究書が最近出ていて、例えば一九〇〇年代ぐらいの地方から上京した学生たちはどういう下宿生活をしたかという研究が少しずつ始まっているのですが、よくわからなことが多いです。それと文学者はそういう世俗のことは書かないというようなことがあり、魯迅のこともなかなか書いてなかったりします。

**波田野節子** 私も、韓国人留学生はそうやって生活していたと、何かの本で読みました。しかし『愛か』の登場人物は日本人なので、日本でも地方から上京した学生はそうやって暮らしていたのか、知りたいと思いました。

**四方田犬彦** 明治学院の学生たちばかりで集まったかどうかはわかりませんが、県人会などは相当にあったと思います。

**波田野節子** 学生たちが一つの家を借りる、女中さんを置く、長になる人がいる、と。あそこには「主人」が出てきますが、試験の話をしているのでやはり学生ですね。

**黒川創** 熊谷直正というのは……。

**波田野節子** わかりません。白金学報で『愛か』の次に載っている『星狂人』という山崎俊夫の小説に熊谷君という登場人物が出てきますが、本当に熊谷君なのか、容貌の端正なところ、ロマンチストなところから、もしかしたら李光洙か、とも想像しています。

**四方田犬彦** 名簿を見ますと、その当時の明治学院は一年

が大体三十人ぐらいですが、その中で大韓帝国留学生が五、六人います。ということは結構多いですね。いま私のゼミに二人ほどいますが、まだ少ないという感じで、昔は非常に多かったわけです。では二万人いた支那留学生はいるかというといない。何しろ日本語弁論大会で一位になったりするぐらいですから、『白金学報』などで結構活躍します。先生の半分が大体アメリカ人の牧師先生で、英語です。この人たちは日本のいわゆるナショナルリズムからは距離を置いています。そういう意味では東京の中にいながらも、W先生のような方や、独立宣言をきちんと英語に直してくださるような方がたくさんいたということだと思います。これは一九〇〇年代における明治学院の歴史の中で非常に大きいと思います。そのあとここには韓国から多くの人材がやって来て、多くの人材が輩出されたということは、明治学院史の研究課題だと思います。

**波田野節子** 御稚児さんで思い出しましたが、後に『林巨正』という長い作品を書いた洪命憲ホンメイケンという人がいます。彼は明治学院には来ませんでしたが、同時期東京に留学中で、李光洙の文学の先輩格でした。彼の下宿に泊まる時は、抱き合って寝ていたようです。上海にいたときにも彼は洪命憲と会っているのですが、「もう私たちは子どもじゃないから昔みたいに抱き合って寝るわけにもいかない」というようなことを書いています。この人たち中学校のときはそういう寝方をしてたのか、と逆に考えました。

**四方田大彦** ご質問どうもありがとうございます。日本ではこういうふうな形で李光洙についての講演及び質疑応答ということがなかなか行われません。韓国では中学、高校の教科書から入っているような作家が、日本ではまだ文庫本に一冊も入っていないというのは非常に残念で遺憾だと思いますが、これを機会に日本文学全体あるいは東アジア文学全体、そして話題に出ましたクレオール文学という現在の問題意識の中の大きなコンテクストの中で、我々は李光洙のことを考えていきたいと思っております。

今日は波田野先生をお迎えして貴重なお話しをいただきました。それでは皆さんどうもありがとうございました。これをもって閉めさせていただきます。

本稿は一九九三年十月二十九日、本学本館二二〇一教室で開催された公開講座「明治学院ゆかりの文学者たち」の第二回、「韓国近代文学の父 李光洙と明治学院」の全記録を収録したものである。